



Flower for tea ceremony

## Paeonia japonica

Souga Nagai

### 山芍薬

茶花 永井宗賀

ももよがよ  
百夜通い

### 小野小町の物語

「花の色は 移りにけりな いたづらに  
わが身世にふる ながめせしまに」

花の美しさは、むなしく色褪せてしまった。長い雨の降る間に。

同じように、私も年を重ねてしまった。ぼんやりと物思いにふけっているうちに。

百人一首にもある、小野小町の歌。女流歌人として有名ですが、

彼女の晩年は諸説あり、謎が多い人物です。

その一つに「百夜通い」というお話があります。

都を離れ、隠居生活をした小町ですが、そんな彼女に恋をしている人物がいました。

深草少将、彼は小町に想いを告げますが、彼女は取り合ってくれません。

芍薬の花が好きだった小野小町は、こんな提案をしました。

「百日間、高土手に毎日芍薬を植えて下さったら、貴方の御心に添いましょう。」

深草少将は野山で芍薬を探し、雨の日も風の日も、芍薬を植え続けました。

そして最後の百日目の日。それは大嵐の日でした。

皆が止めるのも聞かずに、深草少将は最後の一本を植えに行きます。

しかし大雨で橋が壊れ、巻き込まれた彼は亡くなってしまったのです。

小町はどんな想いで、九九本の芍薬を見つめていたのでしょうか。

写真の芍薬は「山芍薬」といい、茶道では茶花として荘られます。

紙細工のように薄い花びら、しかしその中心をくつきりと紅に染めたこの花は

女の儚さと矜持を胸に秘めた、小野小町の心を映しているかのようです。

(古今和歌集 卷二春哥下一一三、小倉百人一首 九番)

### 花物語

比田井宗玉

